

Principal Correspondence

「一万円札見ましたか？」



お札が変わって一万円札は渋沢栄一に代わりました。私はまだ見ていません。縁(円?)がないのかも?かもしれません。

渋沢栄一は日本の経済の父とよばれている人です。

なぜか?

私の持論ですが、「政商のような生き方はしなかった」ことに尽きると思います。

政治と一定の距離を保ちつつ、いろいろな産業を興し、社会奉仕にも勤しんだ生き方が清々しいのです。

渋沢翁の代表的著作に「論語と算盤」があります。弱肉強食・商道德や法律が未整備の文明開化の頃、「**道德と経済は並び立つものである**」という趣旨の本でありました。もしこの本が「論語か算盤」でしたら、道德と経済は対立し、どちらかを選択するという意味になります。

「**と**」という言葉は **Inclusion (包摂性)**、きわめて日本的調和の精神を表しています。

世の中「**痩せたいが甘いものは食べたい**」という矛盾する要求を「**トレードオフ**」の関係と言いますが、その矛盾をまとめていく表現を「**と**」という言葉は含んでいるのです。

「あれかこれかを選びなさい。」と私たち現代人は教えがちですが、

「**あれとこれがうまく共存できることを考える。**」

これが日本的調和の精神であり、今や世界が求める

sustainability(持続可能性)の鍵となる言葉かもしれません。



Principal Correspondence

「ほめて育てるはうそ？」

ちょっと古い話ですが、2000年代の教育は「ほめて育てる」でした。

大阪大学の調査で1980年「自分はダメな人間だ」という問いに対して「良くあてはまる」と答えた高校生は12.9%でしたが、2002年に30.4%と跳ね上がり、2011年には36.0%とほぼ3倍になりました。

自分を有用な人間だと認識することを、「自己肯定感」と言いますが、これは「ほめて育てる」ことが必ずしも自己肯定感にはつながらないこと、むしろ阻害する可能性があることを示唆していると言われます。



子どもたちの学校生活を楽しくしよう！と、いやな思いをさせないために、できるだけ叱らず、厳しさを排除していると、好きなことだけやればいい、興味の無いことはやりたくない、注意されるとむかつく子になります。

楽しくないことも自分で克服していかないと愚痴だらけの人生になってしまいます(褒めると子どもはだめになる・榎本弘明・新潮社)。

多少嫌なことも取り組めば、習熟し、楽しさもわかり、眠っていた才能が目覚めるチャンスも出てくるというものです。

私は、「ダメなものはだめ」と言いますが、善い行いや、自分が「やったー！」と感じているときには褒めるのではなく(充分に)「認める」ようにしています。

